

■研究十二月往来(282)

「命には終りあり、能には果てあるべからず」の東西

— 世阿弥とヒッポクラテス —

天野文雄

標題にかかげたのは、いうまでもなく『花鏡』の掉尾を飾る「奥の段」の、「初心忘るべからず」のうちの「老後の初心忘るべからず」の条にある名句で、意味するところは、「人の一生にはかぎりがあるが、能の修行には終わりはない」というほどの謂である。そもそも、この句がある「初心忘るべからず」の条も含め、「奥の段」全体が、一貫して「若年より老後まで習ひ徹ることを説いているのであって、その点、「命には終りあり、能には…」は「奥の段」を象徴する文句と言つてよいかと思う。また、世阿弥がこの文句を記したときの年齢は六十歳前後だから、「命には終りあり」も「能には果てあるべからず」も、五十年を超える長い年月を役者として過ごしてきた世阿弥の偽らざる実感でもあったはずである。

さて、この世阿弥の名句は、世阿弥の芸論研究のうえでは、しばしば紀元前五く六世紀の古代ギリシアの医学者ヒッポクラテスの「芸術は長く、人生は短し」と対比されてきた。その最初は、能勢朝次氏の『世阿弥十六部集評釈(上)』(昭和十五年、岩波書店)のよう

で、

その「奥の段」の「評」の項にはつぎのようにある。

老後の初心といふ言葉は一般者には奇異に感ずる所であらうが、「命には終りあり、能には果あるべからず」といふ立場を理解する時、この言葉の真意がわかり、同時に藝術家としての世阿弥が、如何に真摯な態度を能藝に對して持してゐたかを知るであらう。西諺に「生命は短く藝術は永し」といふ句がある。一見すると、「命には終りあり、能には果あるべからず」といふに似て居る如く感じるであらうが、この西諺は藝術作品の時間的命が人間の生命に比べて永世にわたる事を謳歌したものであつて、其の深さに於ては世阿弥の言に比べて、比較にならない浅薄さを持つ。

このように、ここでは、世阿弥の「命には終りあり…」とヒッポクラテスの「生命は短く…」は一見似てはいるが、ヒッポクラテスのそれは、芸術作品の生命が人の命とはちが

て永遠であることの賛嘆であり、両者には雲泥といつてよい差があるとされている。ここで注意されるのは、このヒッポクラテスの言葉が右のように芸術の永遠の生命を言つたものと解されていることである。というのは、この言葉の本来の意味は、現在では、

芸術は長く人生は短し(Ars longa, vita brevis)とヒッポクラテスが医療について言つた語で、「医療の修業には人生は短すぎる」が原義)人の命は短くはかないものであるが、すぐれた芸術作品は永遠の生命を保っている。『広辞苑』

と解されているからである。つまり、現在は、ヒッポクラテスのこの言葉自体は、もとは「世阿弥十六部集評釈」が言うように芸術作品の生命の永遠を謳歌したものではなく、「医療の修業には人生は短すぎる」の謂だとされているのである。もっとも、以上はヒッポクラテスの言葉についての辞典レベルの説明である。それでは、この名句は専門家のあいだではどう解されているのか、それを柳沼重剛編『ギリシア・ローマ名言集』(岩波文庫、平成十五年)でみてみることにする(同書は横組)。

80 人生は短く、技術は長い。

ὁ βίος βραχύς, ἡ δὲ τέχνη μακροή. (vita brevis, ars longa)

伝 ヒッポクラテス

ヒッポクラテスだから元はギリシア語だが、カッコ内にあげたラテン語訳の方がはるかに有名になっていて、しばしば「芸術は長く、人生は短い」と引用されている。ヒッポクラテスは医学者だから、彼がここで言う技術とは医師のことで、「医者の一生涯は短いものだが、医師の生命は長い」という意味になる。その「技術」が「芸術」という日本語にされたのは、ラテン語 *ars longa* は英語なら *art is long* で、*art* は「芸術」だと安直に理解され、しかもそのうえ、「技術は長く……」というよりは「芸術は長く……」とした方が、言葉として意味深長に響くからであろう。しかし18世紀以前に関しては、*ars* (あるいは *art*) を「芸術」と訳したら、ほとんどの場合誤訳になる。ついであるが、*ars* とラテン語訳されたギリシア語は *τέχνη* (*technē*) である。

さすがに専門家の解説だけあって、ここには問題のヒッポクラテスの言葉が、その原義とラテン語訳、そして、わが国におけるラテン語訳を媒介に普及した「曲解」について明快に説かれている。また、この言葉が「伝ヒッポクラテス」とされているのは、これが「ヒッポクラテス全集」(邦訳はまだないらしい)にはみえないためかと思われるが、ともあれ、これによってわれわれはこの言葉の正しい意味を知ることができるわけで、それは前掲の『広辞苑』に言う、「医師の修業には人生は短

すぎる」、つまり「医師の修業には終わりが無い」ということになる(『ギリシア・ローマ名言集』の説明ではそのあたりがややあまいだが、そう解してよいようである)。

ひるがえって、昭和十五年の『世阿弥十六部集評釈』のヒッポクラテス理解をみると、それは明らかに、もと「技術」の意味であったものを「芸術」の謂と曲解した事例である。その結果、世阿弥の言にくらべて比較にならないほど浅薄という評価になったのだが、じつはヒッポクラテスの言葉の意味は世阿弥の言葉と同じであったわけである。もっとも、このヒッポクラテスの言葉がわが国に紹介された時には、原義は正しく伝えられたが、その後、一般には曲解されて広まったのか、あるいは、原義も曲解されて紹介されたのかは、門外漢の筆者にはわからない。『世阿弥十六部集評釈』の記述などからは後者のように思われるが、どうであろうか。

なお、ヒッポクラテスの言葉の語順は、人口に膾炙している「芸術は長く人生は短し」ではなく、その逆が正しいようである。『世阿弥十六部集評釈』も「生命は短く……」であり、『意匠』昭和十六年八月号に載った稲垣足穂のエッセイのタイトルも「人生は短く芸術は長し」だから、この時期まではこの正しい語順で用いられていたようである。

これでヒッポクラテスの言葉の意味と、それが文字どおり名句であることが確認されたわけだが、それと同じ金言が期せずして時と場所を隔てたわが国にも生まれていたこと

は、まことに面白い偶然といえよう。月並みな感想だが、「一行三昧」に徹した者が至りえた境地は洋の東西を問わないということであろう。

ところで、わが世阿弥の「命には限りあり、能には果てあるべからず」は、曲解されて広まったヒッポクラテスの言葉の影響であろう、ともすれば、「命は有限だが、芸術としての能は永遠だ」という意味にとられがちである(たとえば、「巨人軍は永遠だ」のように)。このことについては、『世阿弥 禅竹』や『岩波講座 能・狂言Ⅱ(能楽の伝書と芸論)』などで、表章氏が注意を喚起されているところだが、世阿弥の芸論研究のうえで、「先ず人間の生命には終局があるが、能に於ては終局といふものは絶対が無い。即ち、どこまでも進歩し深まつて盡くる所なきものは能である」(『世阿弥十六部集評釈』(口訳)、「生涯にわたる精進を尽してそこに見出される道の無限を感嘆した一句」(西尾実氏「花鏡」の問題)、昭和十七年刊『能楽全書』のち、同氏「世阿弥の能楽論」所収)のように、「役者としての修行には終わりが無い」という正しい理解で一貫している。(大阪大学教授)

〔付記〕小稿をなすにあたっては大阪大学の渡辺浩司氏(西洋古典学)の示教に与かった。